



《資料展示コーナーの紹介》

川路の歴史を探る —旧川路村役場文書の調査成果より—

歴史研究所では、12月より新たな展示を始めます。「川路の歴史を探る」と題し、旧川路村役場文書調査の成果の一端を紹介します。

歴研ニュースでも何度か取り上げましたが、2016(平成28)年度から2年をかけ、旧川路村役場文書の調査に取り組んできました。これにより、川路自治振興センターの蔵に残る、江戸時代～現代(昭和)の史料、約16,500点の全貌が明らかになりました。こうした史料は、かつて川路に生きた人たちが、地域の存在証明として大切にしてきた宝だといえます。現在の川路で生活する人びとをはじめ、研究などに積極的に活用されることを願っています。



今回の展示では、次の4点の史料をご覧くださいませ。

(縦120cm×横242cm)

①宝暦4(1754)年「下川路村・時俣村・今田村天竜川争論絵図」(上写真)

宝暦3年、今田村が天竜川に新しく堰を築き、当時2本あった流路の1本を閉じてしまいます。これに、対岸の下川路村(現在の川路)と時俣村が反発し、争論になりました。この絵図は、争論の裁定のなかで作成されたものです。

(尚この絵図は、実物ではなく写真で展示します)

②大正12(1923)年「下川路村第六区養蚕組合第二回育蚕品評会審査報告書」

この史料は、大正12年に行われた繭の品評会の審査報告です。川路村では、地区ごとに養蚕組合を設け、蚕種の共同購入、共同催青(蚕の孵化)、養蚕教師による技術指導などに取り組み、良質な繭の生産が目指されました。

③昭和17(1942)年「分村開拓民関係綴」

戦時中、国策に従い川路村からも多くの人びとが、移民として満洲へ渡りました。この史料には、長野県学務部長や経済部長から川路村長宛に送られてきた通牒や、村民に発送した文書が綴られています。旧川路村役場文書の中には、満洲開拓関係の簿冊が125点残されています。

④昭和20(1945)年「豊川工廠吉原部隊終結関係書類(天竜一号)」

アジア・太平洋戦争末期の昭和20年5月、豊川海軍工廠の一部が天龍峡一帯に疎開してきました。また、海軍吉原部隊が地下工場の設営のためにやってきました。この史料には、疎開工場用地の地籍、面積、所有者などが記されています。



伊那谷の兵士たちの思いを想像する



市民研究員 上河内陽子



このたび、市民研究員の認定をいただきました。思えば、市民研究員候補としての3年間は長いとも短いともつかない、日常生活とは違う時間の中での道のりでした。

きっかけは2014年6月、飯田市歴史研究所での資料整理のアルバイト初日に、担当する1000通をこえる軍事郵便に出会ったことです。それは旧川路村で小学校・青年学校教師をしていた今村正業氏宛ての戦地の兵士からの郵便でした。私は毎日、端っこが破れそうな葉書や、折りたたまれた薄い便箋を開いては目を通し整理していきました。はじめはアジア・太平洋戦争期の古ぼけた郵便物に少しの気味悪さがあったことは否めません。しかしそのうち兵士たちの肉筆の書にすっかり夢中になっていきました。

「先生お元気ですか、月が青白い光を放ち大陸を照らしています、敵が橋梁を破壊しました、故郷の水害はいかがですか」

あまりにも強烈な体験でした。兵士が確かに書いたという空気が紙上に漂っていました。それが兵士の最後の手紙、ということもしばしばだったのです。

戦争の時代とは何だったんだろう。当時の安岡健一研究員が紹介してくれた多くの関連書籍を読み耽りました。その筆頭には加藤陽子先生の『満州事変から日中戦争へ』（岩波新書）がありました。安岡さんに導かれ市民研究員候補となり、その後、後任の羽田真也研究員に月1回の面談でご指導頂きました。市民研究員ゼミで吉田伸之所長ほか多くの方から助言を頂き、聞き取り調査で関係者の方々にお話を伺い、資料調査を行い、ようやく修了論文「今村先生に届いた戦地からの手紙」が仕上がりました。

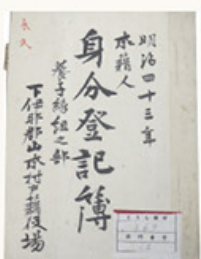
羽田研究員、田中雅孝調査研究員のほか、大きな影響を受けた加藤陽子先生にも査読いただけたことは幸甚の至り、感謝にたえません。その全ての体験が有難く胸に残っています（今年度発行される年報16号に拙文の一部が掲載されます）。このご縁に感謝しつつ、亀のあゆみでも、今後も学び続けられることを願っています。



「今村正業氏宛軍事郵便資料」
(飯田市歴史研究所資料番号353-1)より

旧山本村役場文書調査を開始しました

10月3日、山本自治振興センターと飯田商工会議所山本支部ご協力のもと、旧山本村役場文書調査事業を開始しました。歴史研究所では、合併以前の旧村役場文書の調査・整理を行っています。今年度は、山本自治振興センター蔵の2階に保管されている旧山本村時代の役場文書が対象です。この事業は、「史料保存状況の改善」「正確な目録の作成」を主要な目標とします。



旧村役場文書は、近現代にこの土地に暮らした人々の営みを伝える重要な史料です。調査終了の暁には、住民の皆様にも成果を還元していきます。

(研究員 太田仙一)

上・・・近現代の山本の姿を示す絵図・公図類が大量に残されています
下・・・明治期の史料が豊富に残されているのも旧山本村役場文書の特徴です

地域史講座を開催しました

「川路村の養蚕業に生きた人々の歴史」

川路村では、明治期以降、天竜川の氾濫原の肥沃な土壌を利用して、桑園開発が進展し、下伊那でも養蚕業が最も発展した地域となりました。協同組合方式の組合製糸と一体化して養蚕組合が各集落に結成され、協同の力で高品質の繭生産が目指されました。また、戦後も、養蚕業が長く存続する地域であったこと等を報告しました。本講座には、今でも養蚕業を営む住民の皆さんも参加し、絹産業文化を伝承していく地域課題について、活発な意見交流を行うことができました。



朝日農業賞受賞記念ふろしきと繭



(調査研究員 田中雅孝)

「伊那谷の世界史」を編む試み 円卓会議への期待

板垣雄三（東京大学名誉教授）

歴史教育では、昔の「国史・東洋史・西洋史」の三分類はもちろん「日本史・世界史」の二本立ても反省されて「歴史総合（近現代）」という高校教科も新設され、教養書としてシリーズ「日本の中の世界史」（岩波書店）の刊行もはじまりました。先史考古学・人類学・地域研究の視角が、歴史を観る人全体に〈複眼化〉を迫っているためでしょう。

ラウンドテーブル「〈満蒙開拓〉をアジア東西ないし欧亜の視野で考えなおす」も、そのような動きの一環です。日本で満蒙開拓移民を送り出す事業が国策として推進されたとき、ドイツのナチ政権はユダヤ人代表機関との協定によりヨーロッパのユダヤ人をパレスチナに押し出す移送運動を操縦していました。1930年代の同時期に、アジアの東西で展開したこれら二つの並行現象を比較するため、それぞれの研究者が着眼点を照らしあい検討しあう第一歩の研究集会を、市民に公開し、市民参加のもとで開催します。

異なる背景や条件のもとで起きた二つの事態が、植民地主義と結びついた差別や棄民、土地取得と農業重視、先住民抑圧、軍事的布石＝武装移民、将来の労働力・戦闘力を考慮する選抜、送出システム、宣伝・教育、ソ連や米国をにらむ国際戦略、そして共通するユダヤ人問題、などで連結するのです。相互比較があまり行なわれずにきたのは、一方の郷土・日本・東アジアという視野限定と、他方ホロコーストの絶滅局面や人類史的画期という特殊性強調とが、もたらしてきた結果だったのでしょう。

今回はまず、パレスチナ植民に関わる研究のがわから発題します。はじめて出会う研究者たち・市民たちの対話が、伊那谷の満州移民問題の研究に新局面を拓くことを期待するものです。

ラウンド・テーブルのご紹介

「〈満蒙開拓〉をアジア東西ないし欧亜の視野で考えなおす」

と き： **12月15日**  13：30～16：30

と ころ： 松本市勤労者福祉センター 1階 大会議室
松本市中央4丁目7-26（イオンモール東松本の南側）

コーディネーター： 板垣雄三（信州イスラーム世界勉強会代表）・上條宏之（信州大学名誉教授）

問題提起： 臼杵陽（日本女子大）・森まり子（跡見学園女子大）・長沼宗昭（元日大）
芝健介（東京女子大学名誉教授）・小川幸司（長野県高校教員）

主 催： 信州イスラーム世界勉強会

歴史研究所の現場から 一大原薬局史料調査を通して思うこと

歴史研究所では、現在、旧飯田町の本町二丁目にあった大原薬局の史料調査に取り組んでいます。2016年11月より調査を開始し、現段階で8,000点近くの史料目録を作成しました。その過半を占めるのが、明治～昭和前半の薬店の経営にかかわる史料です。これらを分析すれば、薬品の仕入れから、調剤、販売までの全貌が明らかになるのではないかと思います。そのほか、手紙や書籍なども多数あります。また、若干ですが、江戸時代末～明治の本町二丁目に関する史料も残されています。このように、大原薬局史料は、近世～近代の飯田町を知るうえで、たいへん貴重な史料群であることがわかってきました。

大原薬局史料は、2016年の春に、大原薬局の蔵が壊されるとの情報を得て、急遽、歴史研究所が引き取ったものです。現在、地域全体で、使われなくなった建物の解体が急速に進んでいます。その中には、大原薬局史料と同じように、地域の貴重な史料が眠っているかもしれません。実際、歴史研究所では、大原薬局史料以外にも、解体直前の家屋や蔵から預かった史料群をいくつか所蔵しています。こうした消滅の危機にある史料群を救い出し、調査を行って、しっかりと保存していく。それも歴史研究所の大事な使命だと考えています。 （研究員 羽田真也）

※リレーエッセイはお休みさせていただきます。

「昭和40～60年代の木沢と教育
—「学校要覧」を読む」

現在調査中の旧木沢小学校所蔵史料より、『学校要覧』を中心に、地域社会と教育について読み解きます。昭和40年代以降、地域の産業・社会構造が急激な変化を迎える中で、「地域の文化センター」としての学校に人々はいかなる期待をかけたのか。また、学校教員たちは地域と人々、子どもたちをどのように捉え、教育のあり方を考えたのか、などに着目します。

開催日：2019年 **1月26日** (土)
 時間：14:00～15:30
 講師：多和田真理子
 (國學院大學/歴史研究所調査研究員)
 会場：旧木沢小学校 (飯田市南信濃木沢811)

「戦時中の青年たち
—昭和17年の川路青年団の記録を中心に—」

近年、川路地区では軍事郵便をきっかけに戦争体験の研究がすすみました。今回の講座では、飯田市中心図書館所蔵の川路青年団の資料を学びます。当時の用語でいう「銃後」の社会で、青年たちはどんな活動をしていたのでしょうか。戦時中、村に若い男の人がいなくなったと言われますが、実態はどのようなものだったのでしょうか？

開催日：2019年 **2月2日** (土)
 時間：14:00～15:30
 講師：安岡健一
 (大阪大学/歴史研究所調査研究員)
 会場：川路公民館大会議室 (飯田市川路2635)

※参加費や事前のお申し込みは必要ありません。どなたでもご参加いただけますので、お気軽にお越しください。

「天龍社蚕業技術員の検討」

開催日：2018年 **12月22日** (土)
 報告者：太田 仙一 (研究員)

「南信濃郷開拓団と下伊那
—敗戦間際の「無謀な」送出の背景—」

開催日：2019年 **1月19日** (土)
 報告者：本島 和人 (調査研究員)

いずれも 時間：14:00～16:00
 場所：歴史研究所 研修室

※定例研究会は公開で行っています。どなたでもご参加いただけます。

『年報』第17号掲載の論文等の募集

来年度刊行(2019年8月末予定)の『年報』第17号掲載論文等を募集します。

ジャンルと標準枚数(400字詰め換算)

- ・論文40～60枚 ・研究ノート20～50枚
- ・史料紹介10～30枚・調査報告20～40枚

締切：2019年1月26日(必着)

(4月末までに審査結果をお知らせします)

投稿先：〒395-0803 飯田市鼎下山538
 飯田市歴史研究所 年報編集係

※体裁や注意事項などは、これまでの年報をご参照ください
 ※本年度の『飯田市歴史研究所年報』第16号の刊行が諸事情により遅れており、お詫びいたします(来年3月刊行)

歴研ゼミ&ワークショップ
12月・1月の予定

受講生募集!!



スタッフとともに歴史を学んでみませんか。

場所：歴史研究所 研修室

お知らせ

「わが町の建築史ゼミ」は、終了いたしました。来年度、新たに「建築史ゼミ」を開講する予定です。決まり次第お知らせします。



満洲移民研究ゼミの様子

地域史(川路)ゼミ

12月12日
 1月9日・23日
 18:30～20:40
 会場：川路公民館(毎回)
 担当：羽田真也(研究員)

近現代史ゼミ

12月8日
 1月12日・26日
 (第2・第4土曜日)
 10:00～11:40
 担当：田中雅孝(調査研究員)

満洲移民研究ゼミ

第87回 12月1日
 第88回 1月5日
 10:00～11:40
 担当：本島和人(調査研究員)
 齊藤俊江(調査研究員)

思想史ワークショップ

12月5日・19日
 1月16日
 (第1・第3土曜日)
 19:00～20:40
 市民の皆さんが自主的に学び合う場

自分史ワークショップ

1月26日
 13:20～15:20
 ※12月はお休みさせていただきます
 市民の皆さんが自主的に学び合う場

ゼミ・ワークショップの詳細につきましては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL0265-53-4670

開所時間：午前9時～午後5時 休所日：日曜日・月曜日・祝日・12月29日～1月3日